

年間第8主日 2017.2.26

キリストに仕える者

マタイ6：24-34、一コリント4：1-5

「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思いい悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思いい悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思いい悩むな。明日のことは明日自らが思いい悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」

説教

きょうの福音を箇条書きにしてみました。

1. 富と神の両方に仕えることはできない。

2. くよくよ悩むな。空の鳥をみなさい、野の花をみなさい。
3. まずは神の国と神の義を求めなさい。
4. 明日の事は明日の事、その日の苦勞は、その日だけで充分だ。

わたしは空の鳥、野の花と語るイエスのことばが好きです。ときどき思い出しては慰められています。3年前の説教(2014.3.1)でも福音朗読だけでいいでしょ、と書きましたがきょうもそう思います。

いままでセカンドチャーチの説教は福音書の解説というかつこうでやってきましたが、きょうはパウロの手紙のコメントします。第二朗読でコリントの教会への手紙を朗読しましたが採録します。

(皆さん、)人はわたしたちをキリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者と考えるべきです。この場合、管理者に要求されるのは忠実であることです。わたしにとっては、あなたがたから裁かれようと、人間の法廷で裁かれようと、少しも問題ではありません。わたしは、自分で自分を裁くことすらしません。自分には何もやましいところはないが、それでわたしが義とされているわけではありません。わたしを裁くのは主なのです。ですから、主が来られるまでは、先走って何も裁いてはいけません。主は闇の中に隠されている秘密を明るみに出し、人の心の企てをも明らかにされます。そのとき、おのおのは神からおほめにあずかります。—コリント4:1-5

パウロの言っていることを理解するにはちょっとコツがいります。それはイエスの語った福音をパウロはどのように理解しているか、つまりパウロの気持ちになって感じ、理解する視点にたつ、これがコツです。わかりづらいところを短く解説します。

「神の秘められた計画」これはイエスがキリスト、神の子としてこの世に生まれ、わたしたちの罪のために死に、三日目に復活されたこと、そして再臨するという事柄、神の秘められた計画とは人類の救済計画です。そしてこれはキリスト教信仰の奥義となります。(マタイ13:10以下参照)

パウロはキリストに仕える者とはこの神の秘められた計画の実行者、管理者だといっています。わたし（パウロ自身の事）もそうだけど、誰からなんと言われようとも構わないよ、神の計画が時が満ちて完了するとき、つまり「主が来られるとき=キリスト再臨のとき」までは何と言われようとも気にしないと書いています。

だから主が来るまでは先走って裁くなんてできないんだ、それは主（再臨のキリスト）は人の心の企てをも明らかにされるからだよ。そしてパウロは「そのとき、おのおのは神からおほめにあずかります」パウロがいうには、神さまから、パウロよくやった、とほめられるのだ（ほめられるだろう）と結んでいます。

パウロがどういう理由でコリントの手紙を書いたのか？パウロが伝道してできたコリント教会（ギリシアにある当時の大都市、アフロディーテ神殿で有名だった）で内輪もめがあってそれを諫めるために書いたといわれています。わたしたちにはあまりピンとこない「神の秘められた計画」ということば（ギリシア語ではミステーション）もキリストの再臨を信仰していたコリントの人たちには恐ろしいことばとして聞こえたと思います。

イエスがまだ地上に生きておられたとき、イエスはガリラヤの丘でこう諭されました。

空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。6：26

神はわたしたちをよいものとして造ってくださいました。イエスは「あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか」と優しく教えてくださいます。わたしたちは自分を愛しなさいというこのイエスの励ましを受け、神を愛し、隣人を愛するという教えにあこがれ、そしてそのような人、三つの愛に生きる人になろうとするときから、パウロの言う「キリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者」とされるのです。